

第4回東京都人権施策に関する専門家会議議事概要

開催日時：平成30年2月20日（火） 13時30分～15時30分

開催場所：東京都庁第二本庁舎31階特別会議室26

《出席》 戸松秀典座長、江上千恵子副座長、大江近委員、鶴田幸恵委員、
菱山謙二委員、山脇啓造委員（以上6名）

《欠席》 石渡和実委員、後藤千恵委員、佐藤佳弘委員、繁田雅弘委員、
本澤巳代子委員（以上5名）

（1）議題「東京都における人権施策について」

- ・平成29年度における人権啓発の取組について
（人権週間（15秒）・東京サイト（10分）の視聴を含む）
- ・「ヒューマンライツ・フェスタ東京2017」について
- ・平成29年度犯罪被害者週間行事について
- ・平成29年度（公財）東京都人権啓発センターの主な実施事業について
これらについて、人権施策推進課長及び被害者支援連携担当課長が報告した。

・質疑・意見

※2020オリパラに向けてどのように人権尊重の理念を浸透させるか、機運を醸成するかなど、幅広く意見交換

【委員からの主な意見】

- ・ 外国人住民の課題について法務省が行った調査において、住宅探しの際に4割の方が外国人ということで入居を断られた経験があり、3割近くの方が外国人であることを理由に就職を断られた経験があるということだった。
- ・ データをとってどうこうよりも、まずは大学にたくさんの外国人の留学生を入れるなど、いろいろなところで外国人に慣れさせるしかないのではないか。
- ・ 今後のオリパラを含めてボランティアをどうするか、また、人権をいろいろな意味で実現していくためのボランティアを東京都としてどう対応していくのか。オリパラを契機として、それからさらに持続していくようなシステムを組んでいくのか。人権についてのいろいろなこともオリパラが非常に良い契機だと思う。
- ・ ちょうどピョンチャンオリンピックで韓国がいろいろ経験しているから、そこからボランティア・スピリットをどう扱っていくかという情報をもらってはどうか。
- ・ オリパラ教育をやるときに、地域の人や保護者を巻き込んでやっているのので、啓発効果と教育効果を両方得ている。そのオリパラ教育の中に食文化を理解するというのがあり、『うちの小学校ではこの国の人に来て、そこを宿舎にして、あるいは練習場所にして交流しますよ』という小学校が、まず食文化から勉強しているというような都内の公立学校の取り組みをもっとクローズアップできないか。
- ・ オリパラの飲食戦略では、食文化の多様性への配慮が大きなテーマになっている。

東京都として、都内のレストランなどのハラルやベジタリアン対応についてイニシアティブがとれないか。

- ・ 多文化共生プレゼン大会について、3年前にヒューマンライツ・フェスタが始まったときから協力している。主催は東京都だが大学生が実行委員会を組織して、学生たちが運営している。明治、早稲田、法政、中央、東京外大の5つの大学が基本的にゼミ単位で、それぞれ東京都に対して多文化共生の政策提言をする趣旨で、コンテストして3年になる。

(2) 議題「その他」

【事務局より】さまざまな啓発行事への中高生、大学生などの若年層の集客について、特に自発的に個人で参加する場合にどのような工夫が必要なのかご意見をいただきたい。

【委員からの主な意見】

- ・ 自発的に行くというのはかなり難しい。高校や大学などで、例えば人権プラザから講師が行って出前講義をやって、種をまいて、そこでさまざまなことに興味を持った人が行くという形をとっていかないと、自分の問題と関係のないような人権問題に関する興味は種をまかないと出てこないと思う。
- ・ 人権というのはなかなか人集めが難しいという部分があり、小さい頃から人権に関心を向けられるような教育が大事。全体的な状況として、学校教育場面ではやっているように見せかけながら実はほとんどやっていない。制度としての知識を教えるだけであって、子どもたちの心に何も響いていない。小さい時から、何かきちんと気持ちの中に入り込んでいくようなことをやっていかなければならないから、そのためにも、現在の人権プラザは小さい子から大人までいろいろな活用の仕方がある。それには個人よりもやはり団体、組織というのを活用していかないと無理なのではないか。
- ・ 若い人を増やしたいというのは、本当に大変だと思う。こちらからどうですか、みたいな形で小学校に行って、人権について、やさしく、面白く、楽しく講座をやりますのでと、是非、出前講座という形を充実させたらどうか。
- ・ 人権プラザの最寄り駅について、エレベーター利用の案内が車イスの方が利用されるときなどわかりにくい。あまり利用したことがない人にも思いやりや配慮も必要ではないか。
- ・ 人権プラザのスタッフが東京都の小中学校に行って講演する話はよく聞くし、学校もとても喜んでいる。心の教育は非常によくやっているようだが、個別の課題について、こんな差別があるという啓発はしても、その差別解消のためにどういう努力をして、という肝心なところになかなか触れられていない。自分がマイノリティではなくてよかったなという認識しか残らない。
- ・ 中学校の取組に中学2年生で行う「都内巡り」がある。東京都の人権施策なのだから、人権プラザに都内の学校が行けるような環境づくりを我々が考えるべきではないか。学校として人権プラザに出向くのではなく、子どもが選ぶコースの中に人権プラザ訪問を入れてもらうような提案を、毎月行っている定例校長会に働きかけるのも一つの方法ではないか。

- ・ 個人としてどんどん参加してもらおうようにするためには種をまかないといけない。オリパラのボランティアを早めに募集して、その人たちへの教育の中に人権ということを組み込んでいくと、意外とボランティアには若い人たちも関心を持ち、大学への協力依頼も積極的に行う必要があるだろう。募集に応じた人をできるだけ早い時期に集め、そこで教育啓発をやる。可能であれば、人権プラザを実際に見学してもらったことがあってもいいのではないかな。
- ・ プライドハウスは、都はまだ連携もサポートもすることにはなっていないらしく残念だが、例えば、人権部のホームページの相談コーナーのリンクについて、「パートナー」と記載すると、同性愛でも異性愛でも、結婚していなくても、暴力等の問題があるので、そういう文言にするとみんながアクセスできる。「パートナーシップ」のような言葉に置き換えるだけでも少しずつ変わっていくと思うので、ホームページのサイトの文言を見直してもらえたら。

【事務局より】 どのようにお客様に来ていただくかということに加えて、コンテンツの中身をどうするのか、若い人、あるいはもう少し小さい子どもも含めて種を蒔くにあって、こんな内容、コンテンツでヒントがあればお伺いできれば。

【委員からの主な意見】

- ・ 誰も全くマイノリティの部分が無い人というのはいないわけだから、そのようなことに訴えかけるような、基本的な人権の考え方というか、そういうものが伝わる授業は非常に重要。
- ・ 女性の人権について、世界的に言っても日本は非常に遅れている。ジェンダーギャップ指数でも144か国中111位だ。労働においても、例えば東京都言えば女性の管理職の数がまだまだだ。
- ・ 女性がどのように働いているか、女性の管理職がそれなりに増えていかないと男性と対等に話ができるようにならない。女性がどういう問題を抱えているのかは、女性が上に上がって行って初めて問題になることもあるので、そういう意味では、やはりそれなりの数の女性が一緒に働いているということが、男性にとって重要な問題になるのではないかな。
- ・ 日本の場合、残念ながらまだ多くの女性が社会的に進出している状況にあるとは思えない。それは、女性に能力が無いからというのではなく、女性に能力が無いように見せるような文化、女性というのは劣っているのだと示すための仕組み、意味付け、そういうものが昔から日本にあって、何かあると、ほら女性だからという話に持って行って、それであれ駄目、これ駄目の話になる。本当はそうではなくて、対等な能力があるのに、そういう能力が育まれる仕組みを作ろうとしない男性たち、ちょっといやらしさというのがあるのかなど。
- ・ 各学校の取組の中でユニバーサルデザインを扱っている学校が増えているが、障害者だけのためのユニバーサルデザインという認識が少なからずある。本来は違うはずなのに、それを懸念している。感想として、ユニバーサルデザインは今、学校が飛びついている部分でもあるので、人権プラザの集客という課題を踏まえて、今学校がやっている中身に応えられるような、そんな工夫がもしスペースがあれば可能かと思う。